様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２５３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０４３９５

研究課題名（和文）幼児期の感情コンピテンスを支える文化的要因の検討－感情表出機能に着目して－

研究課題名（英文）environmental factors supporting emotional competence in early childhood : a focus on emotional expression abilities

研究代表者
芝崎　美和（Shibasaki, Miwa）

新見公立大学・健康科学部・教授

研究者番号：００４１３５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：幼児の感情コンピテンスを高める要因について、幼児教育の質、保育者および他児による特性理解という２つの点から明らかにした。第1に、保育場面での遊びの質と保護者による肯定的捉え、特定の他児との愛着関係、保育者との愛着関係が感情表出力の向上に貢献すること、第2に、保育者は実際の幼児の姿からその特性を正確に把握しており、感情表出の困難さは幼児の特性理解にマイナスに影響しないことが明らかにされた。第3に、ネガティブな表情で向社会的行動を示す他児は「意地悪な子」であり、ポジティブな表情で攻撃的に振る舞う他児は「優しい子」であるなど、他児の特性に関する幼児の理解には感情表出の困難さが影響することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、幼児期での感情コンピテンスを高める文化的要因を、保育者との相互作用を含む幼児教育の質、保育者および他児による特性理解という２つの観点から明らかにした。感情表出の困難さが、保育者および幼児における他児の特性理解にいかに影響しうるかを明らかにし、他児や保育者との愛着関係や遊びの質が感情コンピテンスと関連することを示した本研究は、保育環境や遊びの中で幼児の感情コンピテンスを向上させる手がかりを提供したという点において意義がある。

研究成果の概要（英文）：Factors that enhance emotional competence in young children have been identified from two perspectives: the quality of early childhood education and the understanding of characteristics by caregivers and peers. Firstly, it has been revealed that the quality of play in preschool, positive perceptions from caregivers, specific attachment relationships with particular peers, and attachment relationships with teachers contribute to the improvement of emotional expression abilities. Secondly, it has been found that teachers accurately grasp children's characteristics based on their actual behavior, and difficulties in emotional expression do not negatively impact teachers' understanding of children's characteristics. Thirdly, it has been demonstrated that difficulties in emotional expression influence young children's understanding of peers' characteristics. For example, peers who exhibit prosocial behavior with negative facial expressions are perceived as "mean".

研究分野：教育心理学

キーワード：感情コンピテンス　感情表出　保育　遊び　愛着　特性理解

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

感情コンピテンスの基礎は幼児期に育まれる。近年，感情コンピテンスの中でも感情表出能力に困難を持つ子どもに注目が集まり，子どもの社会情動的問題を解決すべく様々なソーシャルスキルトレーニング（以下，SST）が開発されてきた。しかし，一方で SST で培われた能力について日常生活への般化の程度を疑問視する声もある。コミュニケーションとしての機能を持つ感情表出にまつわる能力については，本来，SST のみに依存するのではなく，幼児を取り巻く文化的要因に注目し，遊びや生活の中で向上を図るべきである。そこで，本研究では，幼児期における感情表出機能の発達的変化を明らかにした上で，保育者との相互作用，遊びや仲間関係の質，幼児に対する保育者や保護者，仲間による肯定的捉えという視点から，感情表出能力を高める文化的要因について検討する。

２．研究の目的

研究１：縦断的観察研究の手法を用い，感情表出の困難さおよび困難さの緩和に影響する文化的要因について検討する。

研究２：研究１と同一の幼児を対象に，感情表出能力に関して発達的変化と文化的要因について縦断的検討を行う。

研究３－１：幼児の社会性についての保育者の理解に，幼児の感情表出の有無が影響するかを検討する。

研究３－２：感情表出の有無が，幼児の向社会性と攻撃性についての他児の理解に影響するかを検討する。

３．研究の方法

１）感情表出の困難さに影響する文化的要因の検討（研究１）

縦断的観察研究の手法を用い，感情表出の困難さおよび困難さの緩和に影響する文化的要因について検討した。表情と感情を結びつける能力が概ね 4 歳頃から見られるという先行研究を踏まえ（笹屋，1997），調査対象児は 4 歳児 16 歳児とした。調査対象児について，感情表出に難しさを持つ幼児を抽出するよう保育者に求めたところ，怒りの表出が苦手，特にネガティブな感情を表出せず抑制してしまうといった特徴を持つ幼児 3 名が選定された。選定された 3 名を感情表出困難群，その他 13 名を統制群とし，すべての幼児に対し，タイムサンプリング法を用いて，子どもたちと遊びや生活をともにする中で観察を行い，すべての言動をフィールドノートに記録した。

２）感情表出能力の発達的変化と文化的要因の検討（研究２）

研究１と同一の幼児である５歳児 16 名を対象児とした。研究１で設定された２つの群（感情表出困難群，統制群）を採用した。

（１）社会的行動の発達的変化

調査対象児すべてに対し，タイムサンプリング法を用い，子どもたちと遊びや生活をともにする中で観察を行った。観察対象児と他児，保育者とのやりとり，観察対象児の言動をフィールドノートに記録し，社会的行動の内容，頻度について，縦断的変化を分析することによって，感情表出の困難さに保育における遊びや仲間相互作用がもたらす影響について検討を行った。

（２）社会的行動に影響する文化的要因の検討

感情表出困難群を対象として，参与観察法を用いた観察研究を行い，観察対象児と他児，保育者とのやりとり，観察対象児の言動をフィールドノートに記録し，エピソード分析を行った。その際，縦断的視点から，感情表出群の社会的行動の変容と文化的要因との関連性について分析，考察を行った。

３）感情表出の困難さが保育者による幼児の特性理解に与える影響（研究３－１）

向社会性と攻撃性に関する保育者評定と観察研究を実施し，両者の結果の関連の程度が感情表出の困難さの有無によって異なるか否かを明らかにする。5 歳児 29 名を感情表出困難群と統制群に分け，遊びや生活の場面でタイムサンプリング法を用いた観察研究を行い，向社会的行動と攻撃行動の頻度，種類，エピソードについて分析を行った。さらに，同じ対象児について向社会性と攻撃性に関する保育者評定を行い，保育者による認知と，観察された実際の子どもの行動との関連の程度に，幼児の感情表出の有無が影響するかを分析した。

４）感情表出の困難さが他児による幼児の特性理解に与える影響（研究３－２）

（１）他児の向社会的特性についての幼児の理解に表情が及ぼす影響（研究３－２－１）

4 歳児 36 名，5 歳児 30 名を対象として，仮想場面を用い，向社会的行動を示す他児の理

解に表情がもたらす影響について検討した。調査対象児１人につき２課題（一致条件・不一致条件）を実施した。課題文は，貸与児が被貸与児におもちゃを貸すといった内容についてのものである。一致条件では貸与児の行動と表情が合致しており（ポジティブな表情），反対に不一致条件では両者は合致していない（ネガティブな表情）。課題文提示後，①被貸与児による貸与児の特性理解（優しい・意地悪）について３件法で尋ね，②貸与児の感情について表情図版を用いて４択で求めた。最後に，③関係維持欲求（被貸与児は貸与児と遊びたいか）について３件法で求めた。

（２）他児の攻撃的特性についての幼児の理解に表情が及ぼす影響（研究３－２－２）

４歳児 36 名，5 歳児 28 名を対象に仮想場面を用い，攻撃的行動を示す他児の理解に表情がもたらす影響について検討した。課題文は，行為児が被行為児のおもちゃを取り上げるとった内容についてのものである。行為児の行動が攻撃的行動であることを除けば，手続きは研究３－２－１と同様である。

４．研究成果

１）感情表出の困難さに影響する文化的要因の検討（研究１）

調査対象児の言動は 13 カテゴリー（①主張，②呼びかけ，③応答・応諾，④質問・疑問，⑤抗議・否定・拒否・無視，⑥依頼・提案，⑦謝罪，⑧賞賛，⑨自己賞賛・承認欲求，⑩禁止・命令・注意，⑪驚嘆，⑫からかい，⑬代弁）に分類された。各カテゴリーにおける生起数の割合を算出し，両群の差異を比較検討したところ，以下の結果が得られた（表１）。第１に，感情表出困難群は統制群に比べ，行動のバラエティが少ない。第 2 に，感情表出困難群が統制群を上回っているのは，他児からの働きかけに対する応答や応諾のみである。第 3 に，統制群では感情表出困難群に比べ，「呼びかけ」や「依頼・提案」が多いことから，遊びを開始・展開することが多く，また，一方的に他児の主張を受け入れるのではなく，意に沿わない主張に対しては，「抗議・拒否」を行っている。第 4 に，統制群では，わずかではあるが，他児の行動に関心を示し，驚き，歓声をあげるといった「驚嘆」も見られ，遊びの中で感情経験を得ていることがわかる。これらの結果から，感情表出に難しさを持つ幼児は，社会的相互作用のバラエティの少なさから豊かな感情経験が確保されない可能性が示された。

２）感情表出能力の発達的変化と文化的要因の検討（研究２）

（１）社会的行動の発達的変化

調査対象児の言動の分類には，研究 1 で示された 13 カテゴリー（①主張，②呼びかけ，③応答・応諾，④質問・疑問，⑤抗議・否定・拒否・無視，⑥依頼・提案，⑦謝罪，⑧賞賛，⑨自己賞賛・承認欲求，⑩禁止・命令・注意，⑪驚嘆，⑫からかい，⑬代弁）が用いられた。4 歳時点をⅠ期，5 歳時点をⅡ期とし，各カテゴリーにおける行動の生起数に縦断的変化が見られるかについて分析した。

感情表出困難群の社会的相互作用における縦断的変化の分析結果から（表２），以下の 4 点が明らかになった。第 1 に，1 分あたりの社会的相互作用数が 1.22 回から 1.73 回へと増加した。第 2 に，「呼びかけ」や「提案・依頼」が増加したことから，遊びへの自発性，積極性が増したことがうかがえる。第 3 に，「禁止・命令・注意」が増加したことから，他児の行動をコントロールしたり，遊びのイニシアチブをとろうとする頻度が高くなったと推察される。第 4 に，「自己賞賛」や「驚嘆」もわずかながら増加しており，仲間との感情体

表１　各群における社会的相互作用の生起数

	統制群		感情表出困難群	
	1分あたりの生起数（回）	割合（%）	1分あたりの生起数（回）	割合（%）
主張	0.65	46.72	0.67	54.56
呼びかけ	0.06	4.13	0.02	1.82
応答・応諾	0.03	1.91	0.11	9.09
質問・疑問	0.12	8.45	0.11	9.09
抗議・否定・拒否・無視	0.14	10.37	0.09	7.27
依頼・提案	0.18	13.21	0.09	7.27
謝罪	0.03	1.85	0.02	1.82
賞賛	0.01	0.74	0.00	0.00
自己賞賛・承認欲求	0.06	4.63	0.07	5.46
禁止・命令・注意	0.07	5.18	0.04	3.64
驚嘆	0.03	2.04	0.00	0.00
からかい	0.01	0.37	0.00	0.00
代弁	0.01	0.37	0.00	0.00
合計	1.38	99.97	1.22	100.02

表２　感情表出困難群における社会的相互作用の発達的変容

	第Ⅰ期		第Ⅱ期	
	1分あたりの生起数（回）	割合（%）	1分あたりの生起数（回）	割合（%）
主張	0.67	54.56	0.54	31.10
呼びかけ	0.02	1.82	0.09	5.35
応答・応諾	0.11	9.09	0.09	4.96
質問・疑問	0.11	9.09	0.15	8.85
抗議・否定・拒否・無視	0.09	7.27	0.16	9.14
依頼・提案	0.09	7.27	0.32	18.76
謝罪	0.02	1.82	0.04	2.14
賞賛	0.00	0.00	0.00	0.00
自己賞賛・承認欲求	0.07	5.46	0.15	8.75
禁止・命令・注意	0.04	3.64	0.17	9.91
驚嘆	0.00	0.00	0.02	1.07
からかい	0.00	0.00	0.00	0.00
代弁	0.00	0.00	0.00	0.00
合計	1.22	100.02	1.73	100.02

表３　向社会性群、攻撃性群における社会的相互作用の1分あたりの生起数（回）

	向社会性群				攻撃性群			
	対象児における行動生起数	他児からの反応			対象児における行動生起数	他児からの反応		
		ポジ反応	ネガ反応	反応なし		ポジ反応	ネガ反応	反応なし
自己主張	0.86	0.59	0.08	0.19	1.37	0.68	0.24	0.45
自己主張（非言語）	0.09	0.07	0.02	0.01	0.08	0.04	0.00	0.05
他児からの働きかけ	0.35	0.23	0.09	0.02	0.43	0.20	0.14	0.09
あきらめ	0.04	0.00	0.04	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
向社会的行動	0.21	0.00	0.00	0.00	0.07	0.00	0.00	0.00
攻撃行動	0.05	0.00	0.00	0.00	0.25	0.00	0.00	0.00

験が広がり，深まる中で，自己を肯定的に捉えようとしていることが分かる。仲間との社会的作用が増加することは，豊かな感情体験を確保することにつながる。遊びの中で，喜び，悲しみ，怒り，驚くといった感情を経験し，それを仲間とやりとりすることで，感情表出能力は高められていくと考えられる。すなわち，本研究結果は，保育における遊びという文化的要因が，幼児の感情表出能力の向上にポジティブな影響をもたらすものであることを意味するものであるといえる。

（２）社会的行動に影響する文化的要因の検討

縦断的視点から，感情表出群の社会的行動の変容と文化的要因との関連性について分析，考察を行った。ここでは，その１例を報告する。

他児との相互作用におけるＡ児の感情表出に質的な変化が認められた段階を３つ（Ⅰ期：行動と感情の一致・不一致，Ⅱ：感情の言語化と仲間関係の広がり，Ⅲ期：友達との繋がりの中での感情の表出）に分けた。Ⅰ期は，他児に対する共感性や向社会的行動などに感情表出が伴わない時期である。この期では，Ａ児は他児と遊び場面を共有するものの，相互作用の対象が特定の女児１名（Ｂ児）に限定されることが多かった（5 月～7 月）。

Ⅱ期は，感情表出には目立った変化は見られないが，特にポジティブな感情が行動に次第に反映されるようになり，遊びにおける相互交渉の対象に広がりが見られるようになった時期である。遊びを共有する他児が増えるにつれ，遊び場面での言語的発話にも増加傾向が見られた（8 月）。他児との相互作用において Ａ児の笑顔が少しずつ見られるようになってきた。Ａ児は表情から感情を読み取ることが難しく，また他児に比べて目立って活発ということもない。しかし，Ａ児の行動をよく観察してみると，向社会的行動が多く見られる。そこで保育者は，本研究を通して得られたエピソードを中心に，養育者が Ａ児のポジティブな側面に注目できるような対話を重ねるよう努めた。その結果，観察当初からゆっくりと Ａ児に対する養育者の見方がポジティブなものに変容し，Ａ児と養育者の間に笑顔が増えた。これは，保育者の働きかけによって養育者の育児効力感が高められたことに帰因していると思われる。

Ⅲ期は，他児との相互作用において，行動に感情表出が伴い始めた時期である。特にポジティブ感情の表出が顕著となり，一方，感情表出の少なさに帰因する他児とのトラブルは減少した。Ａ児のクラスでは，集団遊びの頻度がきわめて少なかった。Ⅲ期では，そのことに注目した保育者が意図的にクラスでの集団遊びを増加させた。集団遊びにおける一つ一つの言語的やりとりは仲間との関係性を密なものとし，仲間の中に自己の存在意義を見つける作業を助けたと推察される。Ａ児の中に育ち始めていた友達意識は，集団遊びの繰り返しによってより強固なものとなり，集団遊びの中で芽生えた「友達といる安心感」は，Ａ児の感情表出力を高める重要な要因となったと推察される。

３）感情表出の困難さが保育者による幼児の特性理解に与える影響（研究３－１）

向社会性と攻撃性についての保育者評定の結果に基づき，向社会的感情の表出が少なく攻撃的感情の表出が多い群（以下，攻撃性群（6 名））と，反対に向社会的感情の表出が多く攻撃的感情の表出が少ない群（以下，向社会性群（7 名））を抽出し，2 群の幼児の実際の行動について観察研究を実施した。その結果，向社会性群は攻撃性群に比べ，向社会的行動の生起頻度が高く，攻撃行動の生起頻度が低いことが示された（表３）。つまり，保育者は実際の幼児の向社会的あるいは攻撃的感情表出の姿から，その特性を正確に捉えているといえる。一方で，相互作用の質には群による差異が見られることが明らかにされ，向社会性群よりも攻撃性群の方が，他者に対する自己主張行動が多いが，他者からネガティブな反応を示される割合も高いことが分かった。

４）感情表出の困難さが他児による幼児の特性理解に与える影響（研究３－２）

（１）他児の向社会的特性についての幼児の理解に表情が及ぼす影響（研究３－２－１）

貸与児の特性について「やさしい」「意地悪」と回答した程度に応じて０～３点を与え，それぞれポジティブ特性得点，ネガティブ特性得点とした。各得点に表情が与える影響について，年齢（２：４，５歳児）×条件（２：一致，不一致）の 2 要因分散分析を実施したところ，ポジティブ特性得点($F(1, 64) = 93.81, p < .01$)，ネガティブ特性得点($F(1, 64) = 60.03,$

$p < .01$)ともに，表情の主効果が有意であり，ポジティブ特性得点では不一致条件より一致条件の得点の方が，反対にネガティブ特性得点では一致条件よりも不一致条件の得点が有意に高かった（表４）。

次に，貸与児の感情についての幼児の理解が貸与児の表情によって異なるかについて，年齢および条件別にχ^2検定を実施した。一致条件では４歳児（$\chi^2(3) = 55.07, p < .01$），５歳児（$\chi^2(3) = 92.67, p < .01$）ともに，泣き，怒り，驚きよりも笑いの表情図を選択する者の残差がプラスに有意であった。他方，不一致条件に関しては，４歳児では笑い，泣き，驚きよりも怒りを選択した者の残差がプラスに有意であり（$\chi^2(3) = 16.13, p < .01$），５歳児では泣き，驚きよりも怒りを選択した者の残差がプラスに有意であった（$\chi^2(3) = 16.22, p < .01$）。

最後に，被貸与児が貸与児と遊びたいかという関係維持欲求に関する質問への回答から，対象児に０～3 点を与え，関係維持得点とした。貸与児の表情と関係維持得点との関連性について，年齢（２：４・５歳児）×条件（２：一致・不一致）の２要因分散分析を実施したところ，条件の主効果が有意であり，不一致条件よりも一致条件の得点が有意に高かった($F(1, 64) = 31.18, p < .01$)。

以上のことから，本研究結果を以下のようにまとめることができる。第１に，同じように向社会的行動を示したとしても，貸与児の表情によって，貸与児の特性についての幼児の理解は異なり，幼児は貸与児の表情がポジティブなときには「優しい子」，ネガティブなときには「意地悪な子」と認識する。第２に，貸与児の表情がネガティブな場合，向社会的な感情に基づき向社会的行動を示していると捉えられない。第３に，幼児は貸与を受けたとしても貸与児の表情がネガティブであれば遊びたくないと判断する。これらのことから，向社会的場面における行為者の表情は，行為者の感情や特性に影響し，向社会的場面における表情と行動の矛盾は，その後の遊びや仲間関係にまで影響することが示された。

（２）他児の攻撃的特性についての幼児の理解に表情が及ぼす影響（研究３－２－２）

被行為児の特性理解について，行為児は「やさしい」「意地悪」と回答した程度に応じて0～3 点を与え，それぞれポジティブ特性得点，ネガティブ特性得点とした。各特性得点に表情が与える影響について，年齢（２：４ 歳，５ 歳児）×条件（２：一致，不一致）の２要因分散分析を実施した。分析の結果，ポジティブ特性得点($F(1, 62) = 23.47, p < .01$)，ネガティブ特性得点($F(1, 62) = 13.22, p < .01$)ともに，表情の主効果が有意であり，ポジティブ特性得点では一致条件より不一致条件の得点の方が，反対にネガティブ特性得点では不一致条件よりも一致条件の得点が有意に高かった（表５）。

次に，行為児の感情理解について，行為児の感情の推測を，「笑い」「泣き」「怒り」「驚き」のいずれに分類した。年齢と条件別にχ^2検定を実施した。一致条件では，４歳児($\chi^2(3) = 11.56, < .01$)，５歳児($\chi^2(3) = 11.71, p < .01$)ともに人数の偏りに有意差が見られ，両年齢児とも「驚き」よりも「笑い」「怒り」の回答が有意に多かった。また，４歳児では「泣き」よりも「怒り」，５歳児では「泣き」よりも「笑い」の回答が有意に多かった。一方，不一致条件では，４歳児($\chi^2(3) = 19.11, p < .01$)，５歳児($\chi^2(3) = 28.29, p < .01$)ともに「泣き」「怒り」「驚き」よりも「笑い」の回答が有意に多かった。

最後に，被行為児の関係維持欲求について，被行為児が行為児とどの程度遊びたいかといった回答について，0～3 点を与え関係維持得点を算出した。行為児の表情と関係維持得点との関連性について，年齢（２：４歳，５歳児）×条件（２：一致，不一致）の ２要因分散分析を実施したが，年齢，条件の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった。以上のことから，幼児は同じようにおもちゃをとりあげられたとしても，行為児の表情が行為と一致してネガティブであれば，「意地悪な子」と判断するが，逆に，ポジティブであれば「やさしい子」と判断する傾向が示された。

本研究で得られた研究知見をまとめると以下の 2 点になる。第 1 に，幼児は同じように攻撃行動を受けたとしても，攻撃的行為児の表情が行為と一致してネガティブであれば，「意地悪な子」と判断するが，逆に，ポジティブであれば「やさしい子」と判断する傾向がある。第２に，攻撃的行為児の感情について，表情がネガティブな場合はネガティブな感情を，表情がポジティブな場合はポジティブな感情を予測する。

以上のことから，他児の表情は，他児の特性についての幼児の理解に影響することが明らかになった。

表４　条件による特性得点の違い（向社会性課題：研究3-2-1）

	ポジティブ特性得点		ネガティブ特性得点	
	4歳児	5歳児	4歳児	5歳児
一致条件	2.75(.65)	2.80(.48)	.08(.50)	.03(.18)
不一致条件	1.17(1.38)	.90(1.18)	1.33(1.33)	1.40(1.30)

（ ）内は標準偏差

表５　条件による特性得点の違い（攻撃性課題：研究3-2-2）

	ポジティブ特性得点		ネガティブ特性得点	
	4歳児	5歳児	4歳児	5歳児
一致条件	.35(.89)	.36(.95)	1.89(1.21)	2.21(1.03)
不一致条件	1.19(1.47)	1.04(1.20)	1.38(1.39)	1.64(1.25)

（ ）内は標準偏差

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 芝崎美和・芝崎良典	４．巻 42
２．論文標題 謝罪についての被害者の認知：加害者の謝罪に関する情報と被害者のパーソナリティに着目して．	５．発行年 2021年
３．雑誌名 新見公立大学紀要	６．最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 芝崎美和・芝崎良典	４．巻 41
２．論文標題 被害者は加害者をいかに認知するか －２つの謝罪情報の処理に着目して－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 新見公立大学紀要	６．最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 芝崎良典・芝崎美和	４．巻 6
２．論文標題 UPI (University Personality Inventory) は退学を予測することができるか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 四国大学全学共通教育センター年報	６．最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 芝崎良典・芝崎美和	４．巻 53
２．論文標題 大学生の心の健康度は４年間でどのように変化するのか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 四国大学紀要人文・社会科学編	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀	4．巻 40
2．論文標題 幼児の協同活動における特徴: アクションリサーチによる会話分析から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 新見公立大学紀要	6．最初と最後の頁 121-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 芝崎良典・芝崎美和	4．巻 5
2．論文標題 具体的事例と関連づけることによって，授業内容の理解はうながされるか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 四国大学全学共通教育センター年報	6．最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀	4．巻 39
2．論文標題 感情表出に難しさを持つ幼児に対する保育学生の介入：感情表出風土との関係性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 新見公立大学紀要	6．最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 芝崎良典・芝崎美和	4．巻 51
2．論文標題 なぜひとはファットマン課題では何もしないことを選ぶのか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 四国大学紀要人文・社会科学編	6．最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝崎良典・芝崎美和	4．巻 51
2．論文標題 青年は孤独とどう向き合っているか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 四国大学紀要人文・社会科学編	6．最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芝崎美和・芝崎良典	4．巻 38
2．論文標題 領域「人間関係」における協同学習の効果の検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 新見公立大学紀要	6．最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 芝崎美和・芝崎良典	4．巻 38
2．論文標題 説明行動と罪悪感・羞恥感情との関連性：青年期女子を対象とした検討	5．発行年 2017年
3．雑誌名 新見公立大学紀要	6．最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 芝崎美和・芝崎良典
2．発表標題 被害者は加害者をいかに認知するか:2つの謝罪情報の処理に着目して
3．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4．発表年 2021年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 休日の座位時間が認知機能に及ぼす影響
３．学会等名 日本教育心理学会第63回総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀
２．発表標題 幼児の協同活動における感情の意味
３．学会等名 日本教育心理学会第62回総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 ひとと理解しあえるという思いと孤独感との関連
３．学会等名 日本教育心理学会第62回総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 睡眠量が認知機能に及ぼす影響
３．学会等名 日本発達心理学会第81回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀
２．発表標題 幼児の他者特性理解：対人葛藤状況下における他児の行為と表情の一致・不一致に着目して
３．学会等名 第61回日本教育心理学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 両親の養育態度の不一致が子どもの自尊心に与える影響
３．学会等名 第61回日本教育心理学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 芝崎美和・芝崎良典・湯澤美紀
２．発表標題 他児の向社会的特性についての幼児の理解に表情が及ぼす影響
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 孤独感類型による孤独への向き合い方のちがい
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 湯澤美紀・芝崎美和・徳田英子・渡辺弥生
２．発表標題 子どもの感情発達を支えるもの：文化・社会・保育の視点から
３．学会等名 日本乳幼児教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 芝崎美和
２．発表標題 幼児期の感情表出を促す文化的要因
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 芝崎美和・芝崎良典
２．発表標題 他児との信頼関係を基盤とした仲間関係の展開
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 孤独感類型尺度LS0の構成概念妥当性の検討
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 芝崎良典・芝崎美和
２．発表標題 知覚された両親の養育態度と孤独感類型との関連
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 外山美樹・湯澤正通・芝崎美和ほか19名	４．発行年 2021年
２．出版社 協同出版	５．総ページ数 206
３．書名 新・教職課程演習第5巻　教育心理学	

１．著者名 入江慶太・芝崎美和ほか11名	４．発行年 2021年
２．出版社 教育情報出版	５．総ページ数 168
３．書名 新・子ども理解と援助：その理論と方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関